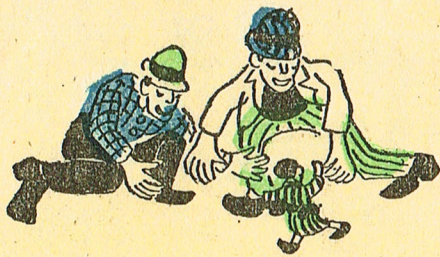
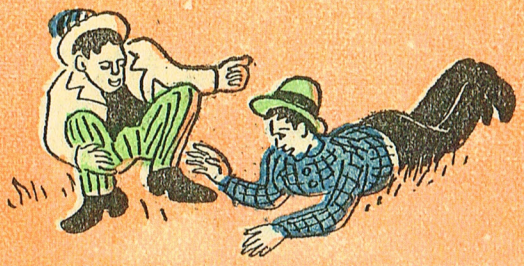


「父様、父様！」
一寸と立ち止つてから靴音は段々此方へ近づきました。
「僕此處に居ます」
「誰だ貴様は？」
さう云ふ聲は父様ではなく、而も不頼漢のやうな風體の男二人でした。アツと思つて身を隠さうとしましたが、チビ太郎は不頼漢の手に拾はれてしまひました。
「ウフ、面白い、此奴これで本物の人間だから面白い、今に又金儲けの種になるよ、拾つて行かう」
「さうだ、それに此奴は小さいから何處へでも隠して行ける、仕事の邪魔にならないから可い」



不頼漢はこんな事を云ひ合つて居ましたが彼方の方に灯影の見える、村端れのやうな處まで来ると、急に立止つて、囁くやうに云ひました。
「まだ少々時刻が早すぎる、此處らで一眠りして行つた方がよからうぜ」
「さうだ泥棒は兎角真夜中に限らよ」
不頼漢の内へ入られたチビ太郎は呆れてしまひました。どうせ善人だらうとは思ひませんでしたし、悪人とも思ひませんでした。チビ太郎はじつと耳を澄して二人の話を聞きました。
二人は今晚彼方の村の、一番立派な白壁の土蔵のある家へ、泥棒に入るつもりで、すつかり手順をきめて、此



「父様、父様！」
一寸と立ち止つてから靴音は段々此方へ近づきました。
「僕此處に居ます」
「誰だ貴様は？」
さう云ふ聲は父様ではなく、而も不頼漢のやうな風體の男二人でした。アツと思つて身を隠さうとしましたが、チビ太郎は不頼漢の手に拾はれてしまひました。
「ウフ、面白い、此奴これで本物の人間だから面白い、今に又金儲けの種になるよ、拾つて行かう」
「さうだ、それに此奴は小さいから何處へでも隠して行ける、仕事の邪魔にならないから可い」



チビ太郎の冒険

永代美知代

チビ太郎は全く小さな、人形のやうな子供です。一寸法師よりも小さい、本當に指指程の大きさしかありません。
「どうぞ子供を一人さつかりますやうに、どんな小さい子供でもかまひません。」
斯う父様と母様が神様にお願ひして、やつと生れたのがチビ太郎でした。ですが餘りと云へば小さ過ぎるので、最初父様は落膽してしまひました。併しチビ太郎は段々伶俐になりました。體こそ小さいけれど、丁度桃から産れた桃太郎さんのやうに、案外力があつて、氣性の確乎した好い兒です。
ですから父様は最う大悦びで、チビ太郎チビ太郎と可愛がつて、何處へ行くにもポケットへ入れて連れて歩きました。
或日、父様は持山の見廻りに出掛けて行きました。そ

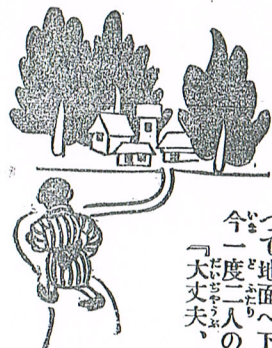
してチビ太郎も一緒に連れられました。ポケットの中から四周の景色を覗いてチビ太郎は大喜びです。
「父様、僕散歩がしたくなつちやつた、おろして頂戴」
「では此處いらで一休みしようかな」
父様は青草の上に腰を下して煙草を吹し初めました。其間にチビ太郎は其處ら面白がつて駆け歩きました。
「餘り遠くへ行なさんなよ」
「大丈夫、僕父様の傍ばかり廻つて居るんです」
チビ太郎は、自分の脊程もある土筆をいぢつて見たり、黄や紫に咲いた葎や都草の花に見とれたり、恍惚して居りますと、突然犬か何か、駆け出して来たと思ふ間もなく、ふいと突き飛ばされてしまひました。
それから何時間かの間、チビ太郎は氣絶して居りました。氣がついた時には四周はもう眞暗でした。
「父様！ 父様！」
聲を限りに呼んで見ましたけれ共、一向何の答もあり



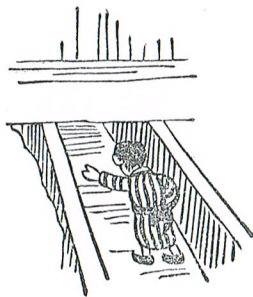
處で夜の更けるのを待ち合さうと云ふのでした。
 「如何かしてあの白壁の家へ知らせたあけたいものだ」
 チビ太郎は一人でこんな事を考へました。それから如何したら不頼漢の手からのがれられるか、第一にそれを考へなければならぬと思ひました。
 併し幸福な事には、不頼漢共は二人共居睡をし初めました。チビ太郎が自分達の會話を聞いたに相違ないと思ひましたけれど、併しほんの拵指程の、人形のやうな小ほけな奴に、何が出来るものかと、みくびつてしまつて、チビ太郎には氣をゆるし切つてゐるのです。
 チビ太郎は暫らくの間じつと息をこらして、不頼漢二人の様子を窺ひました。二人共拵をかけただらしなく口を開いたまま、よく眠込んで居りました。
 チビ太郎はそつと内懐



を這ひ出して、靜かに靜かに膝を傳つて地面へ下り立ちました。そして今一度二人の寢息を窺ひました。
 「大丈夫、今の内に！」
 チビ太郎は一生懸命、彼方の村の灯影を見あてに馳け出しました。若しかして眼を覺ました不頼漢共が氣がついて跡を追つかけて来るやうな事はあるまいか、チビ太郎は幾度となく後ろを見返り見返り、ヒタ急ぎに駆け通しました。
 やつとの事で眼指す白壁の家まで来ました。ですけれども何分にも夜更けの事で、門のしまりが嚴重にされてありました。チビ太郎は裏門へ廻はつて見たり、又た引き返して表門の前で考へ込んだり、入り兼ねて居りました。
 其の内に時間は段々経ちますし、さうかうして居るうち、先刻の不頼漢にやつて來られては堪りません、折角



大急ぎで先廻はりして來た事も何も無駄になつてしまひます。チビ太郎の骨折が無駄になる位な事は可いとしても、それでは何にも知らない白壁の家の人達が氣の毒です。
 「御免下さい、御免下さい、ドンドン、ドンドン」
 併しチビ太郎が勢一杯の聲を張り擧げて呼んだところで、家の奥深く寢込んでゐる人達の耳には入りません、力限り門の戸を叩いたせいで、可哀相にチビ太郎の手は傷きました。



「あゝあ、折角此處まで來たのに！」
 ふと氣がついたのは裏の臺所口の、流しから下水へ通じる穴でした。汚いの何のと、そんな贅澤を云つてゐる場合ではありませぬ、チビ太郎は早速其處から家の中へ這ひ込みました。そして家の人達を呼び覺しました。

「それは大變！」
 それから大騒ぎになりました。と丁度其時刻はよしと塀を乗り越えようとしてゐた不頼漢は驚ろきました。
 「變だぜ、變だぜ、家中起きてゐるやうだ」
 「逃げ出せ〜！」
 「ヤア泥棒が逃げて〜！」
 家の者は大悦びではやしました、そしてチビ太郎のお蔭だと皆なでお禮を云ひました。

「あなたは本當に偉い方です、お蔭で助かりました、一體何處の坊ちやんですか」
 チビ太郎は父様と持山を見廻つてゐる途中からの出來事を話しました。そして白壁の家の人に送られて無事に父様のお家へ歸る事が出來ました

